

【現代語訳】

咲き匂う満開の桜見物客の人に酔い、今が丁度宵の口だ。

野暮ったいやつも何度か色町に出入りしていると段々と粋な男になると云う。ここは好色の「仲の町」さ。

助六が恋焦がれる花魁「揚巻」に会いに、傘を差してやってきた。

廓は夜の雨に濡れ、女郎が並ぶ格子の店は、開店合図の三味線に鐘の音が添えてくる。

鐘の定番は上野か浅草だが、伊達男の定番は花川戸助六だ。

この助六の紫の鉢巻には、何やらゆかりがあるらしく、藤波の波が洗うごとき色香で、千年の美しさなのだよ。

鬘は刷毛先を松葉のようににし、月代は広く剃った透額にして、

土手八丁の日本堤から大門に至る衣文坂を、雨でも通い慣れているのか、黒漆塗りの高下駄姿でやってくる。「一つ印籠」を付

け、杏葉牡丹の黒羽二重を「一つ前」に穿着て、それを雲に描いた帯は二重廻し、尺八を腰に差し、鮫鞘の脇差を差した姿は、

これ皆さんご存知の、助六の恰好良い出で立ちなのだ。



女郎通いを、そんなに急くな、急きやるなってんだ。

浮世は車と同じだってんだ。

廻る月日が縁となつてな、廻る月日が縁を結ぶんだよ。

恋の夜桜に、浮かれて通う情夫で通っているのがこの俺だ。

廓では、喧嘩仕掛けや色仕掛け、力づくだったり、駆け引きだつ

たりと、流儀／＼があるんで、ガチで勝負さ。

ただでは大門は通さねえぞ。股を潜るとは命がけだぞ。

ええい、下手な土手節を歌うのは止めよ！ 編笠を取って投げて

も面白くもない。大溝に蹴り込んで家形船を振込んでやろうか。

これは一体、何のことだ、喧嘩は「江戸の花」というが。

富士と筑波の山間（藍）にある江戸では、藍染の

「袖形（衣装の袖姿）がイイ男でわたしの恋人」と言う女、

対する男は、「遊女のおまえに命も揚巻」と言つて、

助六が格子の仲の町を闊歩して、カツコイイのでございますよ。